

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第673号 平成26年1月17日

千年猛暑と地球温暖化

気象庁は昨年暮れ、世界と日本の天候を纏め、その速報値を発表しました（平成25年12月25日付朝日新聞他）。

それによると、世界の平均気温は平年より0.2度高く、1891年の統計開始以来2番目に高かったとしています。また、日本の平均気温も平年より0.4度高く、歴代8位との事です。

確かに、日本各地で記録的な猛暑が続くなど、年々暑くなっていると実感しており、今や、札幌でもエアコンは必需品となっています。

気象の世界では、30年に1度という様な高温、低温、多雨、少雨等の気象現象を「異常気象」と称していますが、近年その回数が非常に増えており、世界のどこかで月に10件程度は30年に1度の「異常気象」が起きているそうです（平成25年9月8日付朝日新聞）。

気象予報士の森田正光氏は、こうした近年の猛暑が続く状態に対して「千年猛暑の時代」に入ったといっています（平成25年8月11日付読売新聞）。

「千年猛暑」というのは森田氏の造語らしいのですが、彼によると、千年前の平安時代は太陽の活動が活発で、世界的にも高温の時代だったとの事で、北半球の平均気温は、現代よりも0.2度程高かったといわれているそうです。

こうして見ると、平年よりも0.2度高いというのは近年の特異な現象ではなく、1千年前にも起こっていた気候変動と捉えることも可能です。

アラスカ大学名誉教授の赤祖父俊一氏は、世界の気温を地球規模で見ると、温暖期と氷河期が繰り返されて来ているとしています。また、気候変動の多くは自然変動であり、気候変動から自然変動を差し引いて初めて温室効果ガス（CO₂）の影響が正確にわかると指摘しています（平成25年10月28日付北海道新聞）。つまり、気候変動の要因を、単純に地球温暖化で片づけてはいけないという指摘だと思えます。

また、東京工業大学の丸山茂徳教授（地球惑星科学）は、IPCC（国連の気候変動に関する政府間パネル）が昨年9月に発表した報告書の中で「ほとんどの陸域で、極端な高温の頻度が増加し、極端な低温の頻度が減少する」と指摘している事に対して、そうはならず、むしろ「暑い夏、寒い冬となり、地球全体としては寒冷

化に向かう」と予測しています。

地球温暖化によって地球は益々暖かくなるのか、それとも、円山教授が指摘している様に寒冷化に向かうのか、専門家のいう事にもかなりの幅がありますので、困惑してしまいます。

さて、去年の気象現象について気象庁は、「世界の平均気温はこの100年間で0.69度上昇しており、特に2000年代以降は高温傾向が続いている。今年はペルー沖の赤道付近の海面水温が低い状態が続き、低温傾向になると見られたが、温暖化の影響がそれを上回った」と説明しています。

つまり、本来なら自然現象によってもう少し低温になる筈のところ、地球温暖化の影響がそれを上回って気温の上昇を招いたという事だと思います。

地球温暖化という議論に対しては、その科学的根拠を巡って科学者の間でも様々な議論がありますが、国際社会においては、地球の温暖化に対する危機感は共有されており、昨年11月ワルシャワで開催されたCOP19（国連気候変動枠組条約の第19回締約国会議）でも、全ての国が温室効果ガスの2020年以降の自主的な削減目標を2015年に提出する事が合意された事は、その危機感の深さを象徴しています。

「ツバル」という国は、海面上昇によって消滅の危機に晒されています。地球の温暖化対策は待ったなしであり、自国の利益だけを主張して済む状況では無くなっています。こうした中、日本は、低炭素化技術を含めた温暖化対策技術では世界の先頭を走っていますので、そうした技術を以てすれば、世界の温暖化対策に中心的な役割を果たせる筈です。そしてその為にも、国内における温室効果ガスの大胆な削減に積極的に取り組む等、温暖化対策のソフト面でも世界をリード出来る国になって欲しいと思います。（塾頭：吉田 洋一）